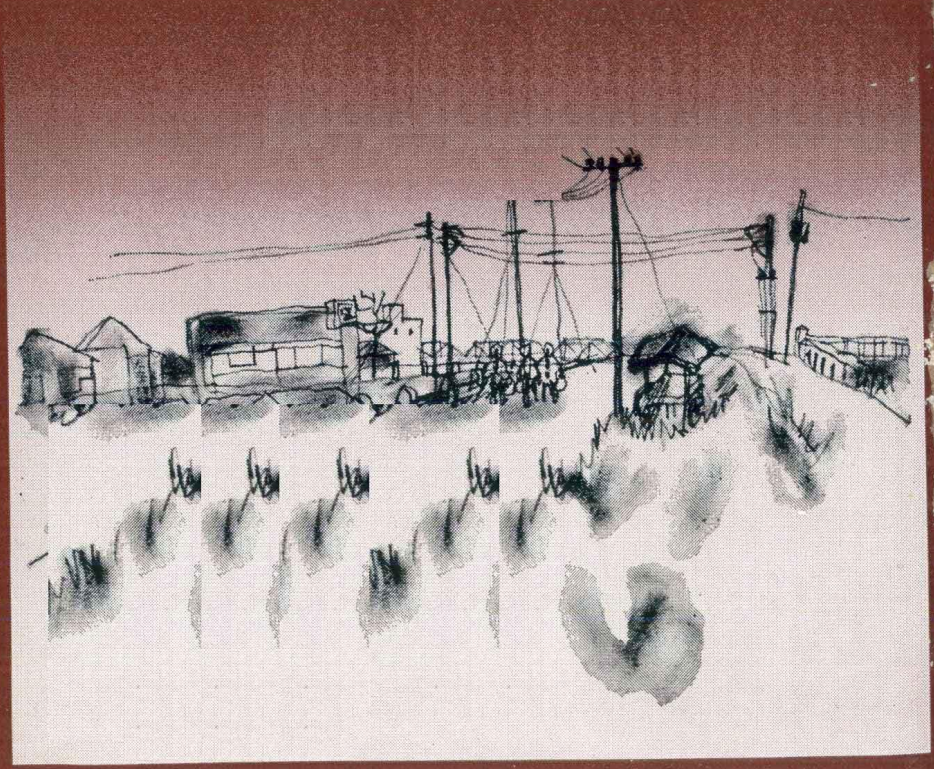
早乙女勝元
小説選集
8

胸さわぎ

早乙女勝元小説選集

8

胸さわぎ



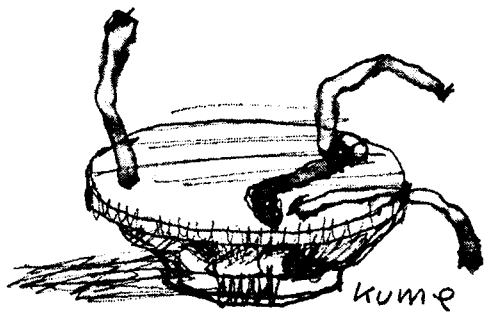
早乙女勝元小説集・8
胸さわぎ
1977・初版
作者　早乙女勝元©
画家　久米宏一

制作　小宮山量平
発行　山村光司
株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一五―六
電話　〇三(203)五七九一
振替　東京九―九五七三六
B6判　314P　0393―90908―8924
一九八四年九月第五刷

胸さわぎ

もくじ

胸さわぎ　5
1　五円の寄付／6
2　ダムの町にて／58
3　鬼娘／98
4　青い貝ボタン／145
チロリアン・ハット　161
頬すりよせて　179
日曜日のデイト　203



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

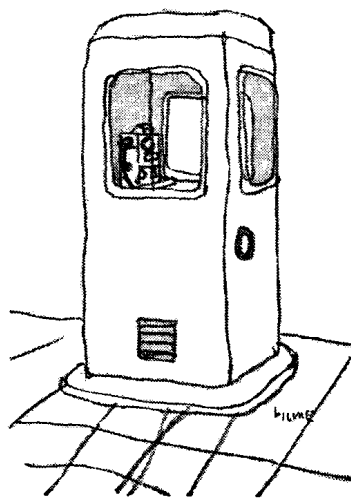
遮断機と恋人たち

夕映えの町の中で／224
第一話　ペンフレンド／225
第二話　特価セーターの橋わたし／233
第三話　別れのチャンス／241
第四話　ひろった手紙／249
第五話　恋は積極的にというが／256
第六話　デイトのあとに／264
第七話　結婚式のその夜に／272
第八話　若者はポンコツカーで／280
第九話　ラーメンの恋人／288
第十話　初恋よ、さようなら／296
エピローグ　プロポーズの時に／304

カバー絵・カット

久米宏一

胸さわぎ



1　五円の寄付

このごろのおれときたら、どうしたわけだろう。

道を歩いていても、乗物にのっても、なにか落しものでもしたようにおちつかない。といって、いつもいつも、足もとばかりをさぐっているのではない。おれの視線の一直線に吸いついていくところは——娘だ。花びらのような娘だ。一日に一度、どこかのステキな娘を見ないことには、おれの胸はみたされぬ。疲れもぬけない。酒をのんでも気分は晴れぬし、めしを食っても、ざらざらと砂をかむように味気ない。

なんだって、そんなに娘に執着するのかと不審に思う人には、娘という字を、もう一度とっぷりと見なおしてもらおう。

女ヘンに良と書いて娘とよぶ。つまり、女の一番よいときが娘で、女に家がつけば嫁、古くなれば姑、波がよって顔にシワができれば婆（ババア）とは、よくいったものだ。家がついたり、古くなったり、波がよったりした女性は、さしあたりおれには関係がない。

なぜなら、おれは、まだ二十一歳。男の一番よいときとはいえぬが、ファイトもスタミナも身体中にいっぱいだ。そして、おれはちっぽけな工場の旋盤工。あまり自慢できる職業ではないかもしれぬが、すくなくとも、花びらの一枚だけは獲得する権利があるというものだろう。

だから、朝と夕の通勤電車で、ステキな娘を見つけると、おれは、かすかな安らぎをおぼえる。ああ、よかったと思う。おれと未来をともにするかもしれぬ娘が、ここにもいたというわけだ。

「はじめまして」

おれは、口もとまで出かかった挨拶をおさえて、そっと彼女に近よる。

ラッシュの力関係を応用して、さりげなく彼女の黒髪のはしにふれてみる。痴漢？　冗談じゃない。さしあたっての友好のしるし、人間みな兄弟のささやかな挨拶だ。

だが、そこまでである。

それ以上はいけない。おれにも、プライドというものがあるらしくて、娘がきッとこちらをふりかえって金切声を上げたら……と思っただけでも、息がつまり胸がすくむ。

「あの……友だちになってもらえませんか？」

ほんとは、率直に、そうきりだしてみたいところなのだ。

しかし、これはおそろしく勇気のいることだし、おまけに友だちのトの音が、いやに発音しにくいときている。ト音は、のどもとまで出かかって、咽頭にガムみたいにひっつき、そこから離れることなく、ついには息のねまでとめようとする。

「と、と……」

と、おれはあせって口ごもる。

そうして、ト音もろとも生つばと一緒にのみこんだ経験も、これまでのうちに何回あったことだろう。すくなくとも、一度や二度のことではなかったように思われる。

ところが、その日そのときにかぎって、おれは、ト音のかわりに、ア音をみじかくはじきとばし

たんだ。

——夜だった。

おれは、三時間の残業をおえて、ぼろくずのように疲れはてた身体を、かろうじて私鉄の通勤電車の吊りかわでささえていた。左手で額をぬぐうと、なにやらぬるっとした感触があった。指先に黒くしみついたものは、汗ではない。疲労が脂のように、じっとり顔面にまでにじみ出しているのだ。

おれは、ヤケクソに、その指先をぐいとズボンの尻になすりつけて、また、吊りかわへ手をのばした。

ぎょっとして、その手をひいた。

吊りかわには、すでに別の手があって、おれは吊り輪のかわりに、もろにその手をつかんでしまったのだ。

それは、かすかにしめり気のある、しなやかな指だった。まっすぐにのばしたら、弓なりにしなって、小さなえくぼさえ見えるような指だった。

おれの胸は、はげしく高鳴った。

すばやく目の玉だけを移動させて見れば、おれのすぐとなり、水色のブラウスの肩に、ビロードのような黒い髪がある。小麦色にはずんだ頬には、つぶらな目がまっくろに光って、そこだけ墨をぼかしたようにあざやかだった。この娘、いつのまに、おれのとなりへきたんだろう。指をつかんでしまったのに、彼女はまったくそしらぬ顔で、暗い窓の一点に目をすえている。

おれは、生きかえったような興奮を感じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かっと、頬がほてってきて、身体中のありとあらゆる血液が彼女のほうへかたよっていくように思い、重心がはずれては困るのであわてて両足をふみしめた。

手をつかんだときに、やあ失礼とでも声をかける機会はあったわけだが、惜しいことをしたと思う。唯一のチャンスは、すでに手のとどかぬ過去へ遠のいていってしまった。では、もう一度吊りかわへ手をのばすか。いやいや、そんなゆとりはない。電車はがくんととまって、もう、おれのおりるT駅へきてしまった。

一瞬、気をとられたので、おれは電車をおりるタイミングをはずし、人なみをかきわけ、おしのけて、無我夢中でホームへとびだした。おれの身体が、電車からすっぽりとはじきだされたとたんに、ドアが自動的にしまった。やれやれと胸をなでおろしたとき、背後に人のけはいがある。

さては、おれよりのんびりしたやつもいるのかと、おどろきあきれ、うしろをふりかえったら、それが意外にも、さっきの彼女だった。

電車のドアのほうへむいて、背をかがめている。なにをしているのだろう。うっかりおりてしまったものの、それは自分の下車駅ではなく、もう一度ドアをあけて乗りこもうといったけはいである。おれは、まゆをよせた。発車のベルが鳴り、やがて電車が動きだした。

すると、彼女のスカートが、ぱあっと日傘のようにひろがったのである。

「あっ！」

おれは、ことの重大さに息をのんだ。

電車のドアに、スカートをはさんだのだ！　彼女は背をまげ、手をのばし、けんめいにスカートのはしをひきはがそうとしたが、ドアは、布地の一端をくわえて離さず、電車はゆるやかに動きだ

す。
それでも、なおスカートははずれない。
電車の動きにつられて、彼女は小走りにホームを走りだした。やむにやまれぬ動きだった。電車が速力を増して、娘がホームに転倒したら……おれは、恐怖のあまり、石のように硬直した。
が、つぎの瞬間、おれの足はホームをけって弾丸のような勢いで彼女のそばへ突進していた。

ホームには、まばらに人影があったから、この危険を目撃した者はおれだけではないはずだったが、とっさの出来事なので、みな棒立ちにすくんでしまったまま声もない。
畜生、だれか車掌へ通報してくれればいいものをといらだちながら、おれは娘と一体になって、電車と平行にホームを走った。小走りに、たたったたっ……と走った。走りながらおれは、彼女の手ののびるところへ自分の左手をのばした。そこに最大限につっぱったスカートの布地の一端があった。デニムのようにかたい布地だ。これでは、かんたんに切れるわけがない。
電車はさらに速力を増していた。
これ以上スピードが加われば、もうダメだ。今だ、今というこの瞬間をのぞいては……
「くそっ！」
おれは、背後からかかえこむようにして彼女の上体をささえ、左手で、ぎっちりとスカートの布地をつかんだ。
たしかに、つかんだ。
娘の足が白くもつれ、荒い息が耳たぶをかすめる。目からぱちぱちと火花がとぶ。目がくらみ、

地がゆれる。もうれつなタックル。タックルにタックル。おれは左手の指先に満身の力をこめて、その手を思いきりぐいと引いた。

「あ！」

とたんに、娘の身体はドアから離れて、軽く一、二間もはじけとんだ。

ゴムマリのようだった。おれは、いやというほどホームの支柱に肩を打って、そして、ぶかっこうな姿で、尻もちをついてしまった。

電車は、急停車した。

ぷしゅッと、サイダーの栓でもぬいたような圧縮音とともに停止した。

見れば、一両車のなかほどまでが、ホームのへりからみごとに突きだしている。よかった。危機一髪とはこのことだろう。おれのタックルがもう一足おそかったら、彼女はホームに転倒し、ひきずられたまま、線路上へころげおちたにちがいない。おれは、ふうっと、口から棒のような息をはいて、おもむろに腰をあげた。

ホームは、人なみで大きくゆらいでいる。

娘はと目をこらせば、人間の渦の中心にもまれながら、駅員の手にささえられていくところだ。渦が改札口へと移動していくので、それとわかる。彼女は今のショックで、貧血でもおこしたのだろうか。無理もない。恐怖のほかに、娘のはじらいというのだってあるだろう。野次馬たちがよってたかって、その後を追いすがっていくのを見ると、おれは急にげんなりとしてしまって、娘を追うのをあきらめ、やれやれとズボンの尻をはたいた。

いいことをしたような半面、自分だけとりのこされたようなさびしさを感じたのは、もちろんの

ことである。
ふいと、おれは目を見はった。
足もとのホームに、なにやら、ぽつんと光る一点がある。水銀灯の明りをチカチカとはねかえすところへ手をのばしてみると、それは小さな貝ボタンだった。
直径一センチほどの丸いかざりボタンは、蝶貝ででもできているのか、青白く透明な光沢が、星のカケラのように美しかった。今のどさくさで、娘の着ていたものからもぎれてとんだのだろう。
残りものには福がある！
おれはつぶやき、それを手にしたまま、ホームを歩いて改札口へとむかった。娘にかえすつもりのものが改札口まできたら、その意志をなくした。
「君たちには用がない！」
駅員室の入口で、野次馬たちが駅員からどなられている。
「スカートがきれたんだ」
雑踏のなかのざわめき。
「それで、たすかったってわけか」
「ヒヤヒヤ」
「おめえ、そこんとこ見たか？」
「見たとも」
「ちょ、うまくやりやがって」
「さっと、スカートをぬいじまえば、こんなことにはならなかったんだ」

「ばか。ストリップじゃねえぞ」

おれは、ざわめきの背後を通りぬけて、ふんと鼻を鳴らした。駅員にかわって、ひとこと投げつけてやりたくなったんだ。——君たちには関係ない！　と。

むしろ関係があったというならば、それは、どこのだれでもない。おれだ、このおれをのぞいてほかにはいない。とっさの出来事で、だれもおれの存在を忘れ、かんじんの彼女さえ、おれの顔をおぼえているとはいえないのだが、しかし、おれのほうは決して忘れはしない。髪の色から、あのしなやかな指先まで、くっきりと目のなかにやきつけてある。

それに、この貝ボタンだ。もしも、こんど彼女とあうときがあるとすれば、このボタンが、おれの男らしさを証明してあまりあることだろう。

娘は、どこのだれやら名前もわからぬが、この時間にこの駅でおりたとすれば、おそらくこの町のどこかに住んでいるのだろう。私鉄のT駅を下車駅とする町は、それほどひろくはない。ひょっとすると、明日にでもふたたび会える機会がやってくるかもしれない。明日にでも！

そう考えると、おれは、胸にはちきれる思いをもてあました。

ボタンの一個に彼女の心がこめられているかのように、おれはぎっちりと手のひらが汗ばむほど彼女の記念品をにぎりしめ、明日という日に手をかけて、ぐいとこちらに引きよせたい衝動を感じたものである。

おれは、いくらかそり身になって、足どりも軽く、駅から家にむかう道を歩いた。歩きながら、明日よこい、早くこいと、子どもの歌を勝手に作りかえて唇にくちずさんだりした。このごろのおれにしては、めずらしくさわやかな気色だった。疲れも、ふっとんだ。おれの歩く町は、熊野神社

の大祭が近づいてきたとかで、黒い屋根のかさなりのあいまから、早くも笛と太鼓の音が流れてくる。

あれは、ナマのおはやしではない。テープだ。町の顔役が、町内会の神酒所にマイクをすえつけ、録音テープをかけっぱなしにして、いまからまつりの気分をあおっているのだ。といって、まつりの費用は、どこからも出はしない。すべて、一般町民の寄付によってまかなわれる。そうすると、あのおはやしも、寄付がねらいの前奏曲といえないこともないが、今夜ばかりはなぜか妙にさえざえと胸にしみる。

「よう」

と、肩をたたかれなかったら、このこころよさは長く尾をひいて、ずっと家までつづいたことだろうに。

おどろいてふりかえると、ニキビだらけのどすぐろい顔が、二つならんでニヤニヤとたるんでいた。おれは拍子ぬけした。いうなれば、おどろく必要のないやつらだった。

「ちえっ、おもしろくもおかしくもねえ顔ぶれだな」

「なんだと?」

「おっと失敬!」

平七と勝次は、おれと中学がおなじで、おなじ工場に働いているのだが、二人の職種は組立部で機械のほうではなかったから、残業に追われることもすくないのだ。今日も定時でしまって、かえり道、どこかで一杯いれてきたらしい。はく息に、酒のにおいがまじっている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com